

あらためて高田（上越市）

ありがとうとう「春の交流会」

瀬尾 隆（鎌倉市在住）

内藤実さんから突然の電話をいただいたのは昨年の正月だった。そのときから私のなかの高田に変化が起きた。

私が高田の土を初めて踏んだのは、第二次大戦の戦局が緊迫の度を増しはじめた昭和十九年（一九四四年）だった。緑故疎開を選んで高田師範附属国民学校の三年に編入させてもらい約一年半余りを西城町で過ごした。

東京に生まれ育ち幼稚園にも小学校にも市電で通っていた私には、どこへ行くにも足で歩く高田の暮らしはかなりのカルチャーショックであった。とはいえ新しい学校で怖ろしい思いや友だち関係に悩まされたという記憶はまったくくない。むしろ、朝の登校時に迎えにきてくれる近所の友だちや川遊びなどに誘ってくれる友人がいて東京にいては知ることもなかっただろうことをいえる教わった。

いま思えば担任の先生や近隣の大人たちのいろいろな気遣いがあったのだからと思う。

夏の日照りのなかで人目を忍んで畑に入って食べた胡瓜の甘さ、菱池での鮎釣り、田んぼでのイナゴ取りと乾煎りしたイナゴの味などが思い出される。

高田での初めての冬は記録破りの大雪だったが、スキーの手ほどきや知命堂の石垣に雪を積んでスロープをつつて遊んでくれた友だちがいたことは覚えていて。金谷山にも麓靴でフットフェルトのスキーを担いで行った。

こうしたことはその良し悪しにかかわらず臉上に光景として焼き付いているのだが、終戦まもなく東京に戻ったことで高田での記憶や経験を反芻できた友だちを失ったことよって小学五年生の頭から彼らの名前も姿も静かに消えていった。

以来はぼ七十年の歳月が流れたが、この間に四の辻近くの楽器店の福田さん（故人）に銀座のヤマハでばったり出会っただけで附属の友人に連絡をとるつもりもないままにいまに至っ

ていた。

そこにかかつてきたのが内藤さんの「ようやくお前さんを掘り出した」、附属同期の新年会をやるから出ておいで」という電話だった。

七十年の空白が果たして埋まるものかどうかと考えながらおそろおそろのグランドアーク半蔵門に出かけた。

東京なのに四十名近い参加者がいることにも驚かされたが、内藤さんの顔すら知らないし、どなたのお顔にも覚えがないという有様だった。

それでも私が高田に疎開していたことを覚えていて声をかけて下さる方が何人かあった。臉にかすかに浮かぶ断片的な光景以外、音も香りもな自分史の空白に何がしかの肉付けができるかも知れないといううかすかな希望がわいた。

そのことから上越ネットワークとの出会いが生まれ、昨年末には東京での附属の忘年会に次いで宇喜世での「喜寿の会」、上越ネットの「春の交流会」となった。

私のなかの高田はこの二年で少なからぬ変化を見せ始めたのである。

前説がやたら長くなったが、このついででもう少しお付き合いをいただきたい。

瀬尾円瑞が榊原政永公に従って姫路から高田に移ってきたのは寛保二年（一七四二年）とわが家には伝わっている。

以来約二百七十年になるわけ

だが御典医の「家」を守るために当家の先祖は代々大変に苦労したらしい。蘭方医の家であったからだが嫡子に恵まれず高田に来てから連続五代にわたって養子を迎えている。四代目になったときに廃藩置県となり、ご維新のもので瀬尾家は高田で医家を開業して一般診療を始め、洋式の病院「知命堂」を創建した。

その関係から瀬尾家では五代目に当たる代に五人の養子を迎えた。当然そこで高田、新井、直江津の地域に親類縁者が増えたのである。だが、養子となって医学を修めに東京などに出了ものの多くは高田に戻らなかった。



妙高山をバックに瀬尾さんグループ（従姉妹会）の記念写真

本家の五代目を継いだ私の祖父はドイツ留学のあと函館病院などに勤めて高田に戻った。高田出身の嫁との間に男二人女三人の子をもうけたが四十歳で病を得て早世した。その五人の子のうち医師になったのは長男である私の父だけだったが、高田中学を出て東京の大学で医学を学び、そのまま大病院に残った。

東京で生まれた私と妹は縁故疎開で初めて高田に住んだ。学童疎開が始まった頃はおそらくもともとは瀧尾家の親類縁者が大勢高田に参集していると思われる。四の辻と五の辻には再び瀧尾家を三軒数えるにいたったが、終戦とともに二軒は東京に戻った。親類縁者に当たる家でも同じように大半が東京に戻ってしまった。

父の兄弟姉妹は成人する頃には皆県外に出てしまった。次男は工学系の道を選び北海道に、姉妹三人はそれぞれ嫁ぎ台湾、米子、東京などに暮らした。この五人兄弟姉妹の子つまり私と従兄弟姉妹関係にある者は全員で十人になるが、学童疎開と戦後の海外からの引揚げで一時高田に住んだのは四人。

残りはもちろんその連れ合いたちは父母から聞かされた以上の高田を知らないのである。父の兄弟姉妹は皆長命で齢九十を数える天寿をまっとうした。後に残った私の従兄弟姉妹たちも、いや成人した孫がいる年齢になり、仕事も退いて時間ができたこともあって父母から伝え聞いた高田に自分たちのルーツを辿ってみたいという想いを抱くようになってきた。しかし、だから

といって十歳に満たない頃に一年半ほど高田で過ごした私に彼ら彼女らと呼び寄せて高田を案内する力は彼底ない。父亡き後に続けた最低年一回の墓参りも、多かつたはずの親類縁者もほとんどないなかで金谷山と菩提寺に立ち寄るだけが終わっていた。

三軒の瀧尾家の累代の位階がある菩提寺での私の知る住職からすてに二代後のお孫さんの代になつていく。

疎開当時の友人知己を辿るすべも道もなく、高田のことについて唯一の頼りとしていた大叔父も一昨年に他界してしまった。

一連の附属の会への参加と上越ネットの「春の交流会」へのお誘いは、そういうなかでまたとな貴重で有難い機会を私に与えてくれるものになった。

ことに交流会は従兄弟姉妹夫婦と私の息子夫婦を高田（上越）につれてくるのにもことに都合のいい適切なプランだった。新入会員が初の参加に十人あまりの人間を連れて行って良いのかどうか気になさったが、皆さんが温かく受け入れてくださったことにあらためて感謝を申し上げた。

一緒にさせていただいた方のなかには、瀧尾家のことをご存知で代がかわって私ともとは疎遠になってしまった親類縁者の消息を教えてください方もあった。

期待する桜の開花が間に合わなかったことは残念だったが、春日山は疎開中、母が弁当を作った妹と私をよく連れて行ってくれたので当時の母の心情を想ってあらためて懐かしさを味わった。

た。

また、高田の古い映画館の建物で、まったく忘れていたジョニー・ワイズミューラー主演の「ターザンの逆襲」を学校から見に行ったことを突然思い出した。まさに終戦直後のあの時期になぜ学校がと考えらとまったくわがわからぬのだが、私にたつては間違ひなく初めて洋画に触れた経験だった。今回案内してもらった先には初めてのところも多かつたが、「くわどりゆつたり村」のように新しい上越市の姿を垣間見られるところもあって上越市の二日間は貴重で楽しい経験になった。

墓参りと法要を兼ねた初めての従兄弟姉妹会として便乗させていただいたのだが、ネットワイクの皆さんのお心遣いで従兄弟姉妹の何人かには話に聞いた瀧尾家の墓と菩提寺を初めて参る思い出深いものになったに違いない。

帰りの列車のなかでも、ゆつたり村での朝食メニューの話や父母が親しんでいたはずの南蛮エビやげんげや塩イカ、刻み味噌漬や翁船などについて話が弾みそれぞれに上越の旅を楽しんでいたようだ。

わが従兄弟姉妹会にとって思わぬ収穫もあった。これまで何回か皆で寄って食事をしたり、旅行をしたりはしてきたが、今回のように初めてお目にかかる方々と親睦を深める会に参加

したお陰で初めて見る（聴く）カラオケ姿の従兄弟姉妹を知ることができた。これはまったく想定外の出来事だったが従兄弟姉妹会の絆を深めてくれたように感じている。多分交流会を企画された方にはわかつていたことに違いないが、

自分でも何を言いたかつたのか良くわからない駄文になってしまったが、交流会に参加するものななかにはこういう人間もいるということを読み捨てただければ幸いである。◆



金谷山でのお墓参り